

隨泉寺寺報

平成28年（2016年） 2月号 第546号

Tel.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺 仏婦講座

講師 明円寺住職 竹田 嘉円師

講題 『私の中にあるもの』

◆【ダーナの日】 「ダーナ」とは、インドの言葉で、「与える」という意味です。檀那とか、旦那と音写されますが、その意味をとって「布施」と漢訳されています。「ダーナ」は、「与える」ということですが、それは本来、他の人に何かを与えるということに意味があるのではなく、自らが所有するものを他の人に与えることによって、自分の所有するものに対する執着心を取り除こうとする、大切な仏道修行の一つなのです。「ダーナ」には、財施・法施・無畏施のほか無財の七施などがあります。募金をして施設等に贈られるみなさんの実践はまさしく財施です。2月7日は九条武子さんのご命日です。

奉仕活動を積極的に進められました九条武子さんを偲んで、その日を【ダーナの日】と定められました。

2月の法座予定

2月 2日……………本部役員会

2月 14日……………掃除 平原西

2月 15日朝席午前10時より……………物故会員追悼法要 おとき

2月 15日昼席午後1時より……………仏婦講座

3月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話—

2月

「念仏の道は如来の開かせたまえる人間の道である」 (池山栄吉)

徳川家康の有名な言葉に「人の一生は重荷を負って遠き道をゆくがごとし…」というのがありますが、年とともに、一層現実をよく表現した言葉だと感じます。この道は希望に満ちて出発しても、途中で迷ったり、行き止まりであったり、なかなか思うようにはなりません。

親鸞聖人が歩まれたお念仏の道は、どんな道でしょうか。阿弥陀如来さまが私に向かって開いて下さっている道であります。しかしながら、外から見れば、やはり、重荷を負うていく道ですから、辛いこともあり、楽しいこともあるでしょう。しかし、この道は、行き先が確かであり、筋の通った道ですから、絶望に沈んでも立ち直り、楽しみに有頂天になっても、我に返ることができます。

殻に閉じこもるのではなく、開かれた生き方が育てられます。阿弥陀如来さまに照らされ、支えられて歩む道だからです。

この世で取り組まねばならない課題は沢山あります。お念仏の道を歩みつつ、精一杯尽くさせていただきます。

☆ 平成27年度仏教婦人会物故会員追悼法要

今年も次の方々がお浄土にお帰りになりました。

1	西塚 敬子	79才	平成27年2月9日	西塚 正知様	長者原西
2	門前 幸恵	67才	平成27年5月18日	門前 二夫様	長者原東
3	君島 ふじ子	92才	平成27年5月21日	君島 雪子様	望ヶ丘
4	坂根 ミサヨ	98才	平成27年10月13日	坂根 藤子様	望ヶ丘
5	山中 壽子	87才	平成27年11月25日	山中 邦昭様	長者原東
6	永留 八重子	91才	平成28年1月2日	永留 勇様	上平原第二

【悲しみに出会ったおかげで 今まで見えなかった世界が 見せていただけるようになった】

これは、相田みつをという方の詩です。聞いてください。

『 なみだをこらえてかなしみにたえるとき

ぐちをいわずにくるしみにたえるとき

いいわけをしないで だまって

批判にたえるとき

怒りをおさえてじっと屈辱にたえるとき

あなたの眼のいろがふかくなり

いのちの根がふかくなる』

悲しみ・苦しみ・怒り・屈辱にであったとき、私自身、この詩を口ずさんでいると、何だかほほえみが浮かんでくるのです。

そういうことで、もうひとつ、私がよく口ずさんで、自分を励ます詩があります。

野村康次郎という方の詩です。

『 雨は ウンコの上にもおちなければなりません

イヤだといっても

ダメなのです

だれも かわってくれないのです』



というのです。この詩は、私を励ましてくれるだけでなく、ひとりの問題の子どもを生まれ変わらせてくれた詩でもあります。

奈良県の小学校の先生が、私の書物の中でこの詩をご覧になり、好きになり、墨で大きく書いて額に入れて教室に掲げておられたのだそうです。その組にN君という荒れた子がいました。荒れざるを得なかったのです。お父さんが、この子のお母さんとこのN君と、弟を追い出したのです。それでお母さんと三人で暮らしていたのですが、お母さんは交通事故で亡くなってしまわれ、弟は施設に預けられ、N君は病気のおじいさん、おばあさんのところに預けられました。おばあさんは、耳が聞こえず、口もきけない方だったのですが心不全で入院されました。肺ガンで床に就いておられたおじいさんは、そのショックで亡くなってしまわれました。それでN君は、追い出したお父さんの家に返され、面白くない日を過ごすことになったのですが、そういう中で、ずいぶん荒れた子になってしまっていたのです。

それが、六年になって、担任してもらった先生が「ウンコ」の詩を教室に掲げておられたのです。はじめのうちは、これを見てもせせら笑ってバカにしていたのですが、だんだん、担任の先生の人柄に心を惹かれるようになっていきました。そして、ある日の授業時間の途中、N君はハツとしたのです。「ウンコ」というのは、自分がいままで出あってきたあのイヤなことではないか。すると雨は自分ということになる。雨はウンコの上にもまっすぐおちている。それだのにぼくは、次々にやってくるイヤなことを憎み、やけをおこしていた。

そうだ、これからは、イヤなことから逃げ出そうとしたり、ブツブツいってやけをおこすのではなく、イヤなこといっぱい やってこいと、こちらからぶつかって行ってやろうと考えるようになったというのです。ところが、不思議なことに、あまり好きになれなかった算数までがおもしろくなってきたというのです。

受けとめ方によっては、イヤなことまで、光った存在に変わってくれるのです。ただ一度の人生を空しいものにしてしまわないために、心に刻んでおいてほしいのです。

